

湯沢幸吉郎氏著「江戸言葉の研究」

松村明

近世国語の研究に志す者にとって、長らくその刊行が待たれていた湯沢幸吉郎氏の「江戸言葉の研究」は、ついにこの春、刊行されるに至った。A5版七百五十余ページの大冊の中には、語法的事実を中心に、江戸語のすがたが、精細に、克明に分類整理して示されており、今後の江戸語研究者にとって、欠くことのできない指針となっている。湯沢氏が、昭和十一年に刊行された「徳川時代言語の研究」において、江戸時代前期の上方語についての研究をまとめられて後、力をもつばら江戸語の研究にそそがれておられたことはよく知られていたことであり、その研究成果の公刊も待たれていた。研究成果の一部分は、「国語史近世篇」や「江戸言葉と東京語」(現代語法の諸相)所収)などにも見られたのであるが、「徳川時代言語の研究」と同じよ

うな形で、江戸語全体についてまとめ発表されるまでにはなかなか至らなかった。

その間、あのはげしい空襲下の戦時生活があり、また戦後のきびしい耐乏生活があったりして、学問研究に志す者にとっては、きわめて条件の悪い日々が続いたのである。湯沢氏自身も戦災によって、家財類と共に蔵書のほとんど全部を焼かれたとか聞いており、戦後にはまた健康もずいぶんと害しておられた時期がおありのようである。本書の原稿も、そのような戦火をくぐり、きびしい生活をくぐりぬけて、無事に守り通されて、ついに今日見るときりっぱな大冊として公刊されるに至ったのである。このような事情をあれこれと思うにつけても、本書の公刊に対するわれわれの喜びは、きわめて大きいわけである。

湯沢氏が「室町時代の言語研究」におい

て、抄物を中心として、室町時代の口語の語法をまとめて発表されたのは昭和四年のことであるから、本書の刊行との間には、四半世紀の年月の経過がある。この間、

「室町時代の言語研究」「徳川時代言語の研究」「国語史近世篇」その他の著作によって、主として、語法の面について室町時代以後の国語史について、基礎的なものがきざかれていったわけである。語法の面では、国語史の鎌倉時代までは、すでに山田幸雄博士の「奈良朝文法史」「平安朝文法史」「平家物語の語法」の三著によって、その基礎がきざかれており、湯沢氏は、その後の時代を開拓せられていったわけであるが、本書の出現によって、国語史は、語法の面では、近世末期までの整理がいちおう完成されたといえるわけである。そういう意味からも、本書の出現の意義はきわめて大きいといわなければならない。

本書は、近世後期に江戸で行われた口語、すなわち江戸言葉(江戸語)を知ろうとする目的の下に、江戸の小説・歌舞伎脚本・落語等の用語を観察したものであるが、その観察は語法を中心としている。ただし、語法以外にも、各品詞にわたって、

時代的に意義のあるおもな語は、その用例をあげてあり、特に助動詞・助詞はすべての語を網羅しようとしている。したがって、本書は、江戸語の語法書であると共に、江戸語辞典的な性格をも多分に持っていると思われることができる。この点は、前期の上方語を記述した前著「徳川時代言語の研究」とだいたい同じ態度で記述されているわけである。

本書の章の立て方なども、だいたいにおいて、前著「徳川時代言語の研究」と同じようであるが、両者を比べてみると、全然同じというわけではなく、二三の点ではかなり違った扱い方をしている。今、両者を対照して示せば、次の通りである。

本書	(徳川時代言語の研究)
第一章 序説	第一章 序説
第二章 仮名遣と発音	第二章 仮名遣と発音
第三章 名詞	第三章 体言
第四章 代名詞	
第五章 動詞	第四章 動詞
第六章 形容詞	第五章 形容詞
第七章 形容動詞	
第八章 副詞	第六章 副詞

第九章 接続詞	第七章 接続詞
第一〇章 感動詞	第八章 感動詞
第十一章 助動詞	第九章 助動詞
第十二章 助詞	第十章 助詞
第十三章 概括	第十一章 結語

右のように、前著に比して、代名詞と形容動詞とをそれぞれ一章として立てている点、まず違っている点として気付かれるが、どうして、前著において一章として立てなかったものを本書で一章として立てたかの説明は何もない。章の立て方の問題だけでなく、前著と本書とで説明のしかたが違っているところが間々見られるが、そういう点についての記述は本書のどこにも見えない。本書の性質上、前著「徳川時代言語の研究」と比較して用いられる場合が多いと思われるが、その際、前著と本書との説明のしかたが違っている点について、何らの説明もないと、いろいろ誤解のたねとなる点があり得る。たとえば、形容動詞の問題など、章の立て方だけを見ると、いかにも前期の上方語にはあまり見られなかつたのが、後期の江戸語になると、はつきり用いられるようになったと誤解されやすい。事実はそのようではないのであって、形容動詞

を立てる立場でいえば、前期の上方語においても形容動詞ははつきり立てられるわけである(前著においては、カリ活用だけを形容動詞として動詞の中に説き、ナリ活用・タリ活用に相当するものは、それぞれ助動詞「な」「じゃ」および「たる」の部で説かれている)。このような、説明の相違は、本書を前著と共に用いる場合には、かなり不便をきたすので、説明の違っている点だけでもちよつとことわり書きをしておいてほしかったと思われる。代名詞についても同様であつて、前著では、体言の章に説いてあるのである。これも、代名詞を独立の章とした理由などについての説明は何も見られない。

もちろん、本書は前著の直接の続編というわけではなく、独立の書であるから、本書としての体系があつて当然であり、それが必ずしも前著のそれに拘束されないわけであるが、一般に江戸時代の前期の上方語と後期の江戸語とはよく比較されるのであり、同一著者の研究の発展としては、やはり体系の同一性が望まれるであろう。そして、相違する点については、何らかの説明があつたらと思われるのである。本書の

説明の体系が前者と違っている面があるために、前期の上方語と後期の江戸語との差違が、かえってはつきり示されにくくなった結果をも来たしている点がないわけではない。

以下、章を追って、本書の内容のごく概略のところを見ていくことにする。

第一章の序説は、著者のいわゆる江戸言葉についての概説である。ここで、著者は、「江戸に行なわれた言語の代表的なもの、すなわち江戸言葉は、主として町人の間に行なわれた言語であって、武家言葉は、武士という一階級に用いられた特殊な言語である」と解しておられる。江戸語についてのこのような考え方は、これまで多くの人のとってきた立場と通ずるが、「武家言葉」を「特殊な言語」と見ていいかどうかにはおいろいろ異なる見解のあるところである。総じて、この「序説」は、江戸語の説明として、要を尽してはいるものの、少し簡略に過ぎるきらいがないわけではない。「江戸言葉」の研究であるから、もう少し江戸語の性格についてのつつこんだ説明をしていただきたかったとも思われる。たとえば、「狂言田舎操」に見られる

「本江戸」と「江戸訛」、あるいは「物類称呼」に見られる「江戸」「江戸田舎」「江戸近在」「江戸近辺」「江戸の四方」など、江戸語と江戸語ならざるものをめぐってのいろいろな用語があるが、そういうような点をも合わせて説明していただけてあつたらと思われる。ここにまた、洒落本・人情本・滑稽本その他の資料のことも説かれていて、いろいろな資料のうちで、著者は人情本を「もっとも価値あるものである」とされている。たしかに人情本は近世末期の完成された江戸語を伝えている点で価値ある資料ではあるが、「もっとも」と言い切ってしまうには、なおいろいろ考え合わせるべき点があるのではないだろうか。

第二章仮名遣と発音には、江戸語の発音のだいたいを主として仮名遣を検討することによって述べられておられる。江戸語を調べる場合には、当然その資料の性格をはつきりさせておかなければならず、それは、仮名遣の実態をまず明らかにしておかなければならない。その点、著者は周到であつて、仮名遣についてこまかく調べておられる。たゞ、この場合に、著者は江戸語の発音をはつきりさせることを直接の目的

としたために、「江戸の作物の中でも、洒落本の仮名遣はもっとも自由であつて、それ／＼の音を表わすあらゆる方法は、この中に尽きて居ると見ることができるとして、主として洒落本を資料として仮名遣を考えられた。その結果、「江戸の作者が仮名遣について、どんな心がまえであつたかを見るに、決して一つの主義方針によつたものでないことが分かる。すなわち今日普通という歴史的仮名遣で一貫しようというのでもなければ、発音的仮名遣で通そうというのでもない。この意味でかれらは仮名遣については、全く無関心であつて、行きあたりばったり、どんな方法であつても、その音が現われさえすればよいのである」というような結論をされている。著者は、洒落本を資料にする場合にも、会話体のところだけを調べられたから、上のような結論をもたれたものと思うが、洒落本にあつても、会話体でない序文・跋文や地の文などの文章体の部分では、歴史的かなづかいがかなり忠実におこなわれていたのである。三馬などの滑稽本になると、これはもっとはつきりしていて、会話体の部分ではなるべく表音式にならうとしているが、文章体の

部分では、なるべく歴史的かなづかいにもとづこうと努めている傾向が明らかに見られる。「かれらは仮名遣については、全く無関心であって、行きあたりばったり」であるとは、かんたんに言えないのではなからうか。この点は、江戸語の資料の性格を規定することにもなるわけであるから、もっといろいろな面から資料を見ていくべきものと考えられるのである。もっとも、著者は、あとの方では、「かれらが、実際の発音をなるべく忠実に精確に写そうとする念の強かったことは認めなければならぬ。かれらが歴史的仮名遣とか発音的仮名遣などの一定の表現法にこだわらないで、いろいろの方法を用いたのも結局右の念の現われであると解すべきである」(六ペ)といっておられるが、会話体の部分に関する限りでは、この通りであろう。

個々の発音に関するところでは、「カ」「クワ」の区別に対して、「あらゆる人が、あらゆる『くわ』『ぐわ』の語を、江戸のはじめから『か』『が』と発音していたと断定するのは、行き過ぎた考えではなからうか。(一七ペ)といわれている点が注目される。従来は、とかく、江戸語では「カ」「クワ」の区別がなくなつたという

面ばかりがとりあげられすぎていたようである。

また、特殊音をあらわすかなとして「さ」「せ」などをあげておられるが、鼻音にならないガ行濁音をあらわす「か」「き」「く」「け」「こ」「こ」についても、触れていただきたかった。

第三章名詞のところには、父母兄弟などの称呼や、接頭語・接尾語の付いた名詞、他の品詞のように用いられる名詞など、主として語彙的なものが集められている。第四章代名詞のところにも、いろいろの代名詞について、その用例があげられてある。この二章は、語法上のことでなく、主として語彙の面の説明が中心であり、この点は、本書が辞書的資格をも持つという面を示すものであろう。ここにあげられた語彙のうちには、時代的に見て特色のあるものが少なくないが、一々の語についてここでは触れている余裕はない。

第五章動詞の条では、活用の種類、音便の形、各活用形の用法、敬讓動詞とぞんざい動詞、補助動詞と特殊動詞、活用その他で注意すべき動詞などについて記されている。まず活用の種類については、五段・上

一段・下一段・カ変・サ変・ラ変の六つを立てる。このうち、五段活用は前者では四段活用とあつたもので、それとの関連からいえば四段としておいてもよいところであろう。すなわち、前期上方語と江戸語とで、活用のしかたに根本的な相違はないからである。また、ラ行変格とは、「下さる」「なさる」「おっしゃる」「いらっしゃる」「つかはさる」の五動詞であつて、ラ行五段活用に比して、命令形の語尾が「い」となる点、「ます」が「い」の語尾に付く点、「ます」の命令形「まし」「ませ」が付く点などが異なるので、これをラ行変格活用と名づけられようとするのである。著者は、この種の動詞を従来「特別ラ行四段活用」と称しておられたのであるが、「あり」の系統の語のラ行変格活用と混同されないために、むしろ従来のも名称のほうがよいのではないかと思われる。

活用形については、未然形・連用形・終止形・連体形・仮定形・命令形・推量形などを立てる。前者の上方語について見ると、推量形を立てず、仮定形は已然形としている。前者で推量形を立てていないが、これは、未然形の一用法として「う」の付くことがあげられているのである。すなわ

ち、四段活用としたのと五段活用としたのとで活用形の立て方に相違が出たわけである。しかし、これはさきにも申したように、上方語と江戸語とで活用のしかたの性質が違ったのではなく、説明のしかたの相違だけである。それよりも、前者の已然形を本書で仮定形にしているところに、著者の江戸語の言語的事実に対する見解を見るべきであろう。国語史の上で江戸語において、はじめて仮定形が立てられるということは見逃すことのできない点であるが、本書のように、前者の上方語に対する説明の体系が違っていると、かえって、そのような重要な点が見落されるおそれもあるというべきであろう。

次に、敬讓動詞と並べて「ぞんざい動詞」というものを立てられているが、これは前者では敬讓動詞に含ませて説明されていた。敬讓動詞・ぞんざい動詞ともにそれぞれ所屬語の意味・用法が実例とともに細かくあがっている、辞書的な役目をもなしている。補助動詞と特殊動詞についても、いろいろの語を示して、それぞれの意味・用法が実例とともに細かく示されている。さらにまた、江戸語に現れる動詞で、活用上注意すべき語や時代色を帯びている語に

についても用例がよく集められている。

第六章形容詞の条では、活用形とその用法、活用のしかたと語幹の用法、補助形容詞その他注意すべき形容詞などについて記されている。活用形には、未然形・連用形・終止形・連体形・仮定形・推量形を立てる。特に已然形のかわりに仮定形を立てたことについては、「強ければ」「涼しければ」などの形は、仮定条件を表わすに用いることが多いので、古い時代の文法で已然形と称するものを、江戸言葉では「仮定形」と呼ぶことにした」(二八四頁)と言われている。動詞の条には、仮定形を立てた根拠を積極的に述べておられないが、これは、当然動詞の条でも述べておいていただきたいところである。

また、形容詞の活用で注意されるのは、「かっ」「かろ」をそれぞれ連用形・推量形に入れてある点である。これについては、「連用形の欄の『かっ』、推量形の『かろ』は、従来形容詞の活用語尾と見るのが普通であったが、本書では江戸言葉の実際の用い方から、これらを形容詞の活用語尾と見なすことにした」(二八四頁)といわれている。前者では、形容詞の活用を、未然「早かる」、連用「早かっ」の二活用形

として、これは動詞中の特殊活用と称すべきであるとされている。ここにも扱ひ方の相違が見られるが、これはやはり統一した説明にされるべきであろう。

第七章形容詞の条では、活用形とその用法、活用のしかたと語幹の用法、その他注意すべき形容詞などについて記されている。活用形には、連用形・終止形・連体形・仮定形・推量形をおき、未然形は欠くとしている。已然形のかわりに仮定形を置くことは動詞・形容詞の場合と同様である。さきにも述べたように、前者には形容詞を動詞の章で附随的にかんたんに説いてあるだけに、本書では独立の章で、かなりこまかく説いている。これは説明の態度の大きな変化である。本書は、前者とともに用いられることが多いことを考えると、このような説明の態度の相違について、本書のどこかで、説明があつてほしかったと思われる。

第八章副詞の条では、語例とともに副詞の用法を説明し、何等かの点で注意すべき副詞の用例が掲げられている。第九章接続詞・第十章感動詞の条には、それぞれ江戸語に用いられるおもな接続詞・感動詞とその用例が挙げられている。これらは主とし

て辞書的な意義をもつといえる。感動詞の章のあとには、応答・別れの言葉とその用例とが示されている。

第十一章助動詞の条は、江戸語に用いられた助動詞を五十音順に並べて、それぞれ、意味・用法の説明とその用例とを示したものである。各助動詞の意味・用法は、かんとんにしかも要領よく整理分類されていて、辞書的な機能をもよく果している。動詞や助動詞の条と共に、本書の中心をなす部分である。一々の細かな点について触れていく余裕がないので、ここではただ、読過の際疑問に感じた点のいくつかを摘記しておくに止める。

「マア酒をはやく持って来う。」(三七九へ)などの「う」は、果して未然形「こ」に助動詞「う(ふ)」の付いた例としてよいであろうか。「来う」を命令形とする(「このびた形」)考え方もできるのではないだろうか。

「たればうたりやうたら」(四一六へ)とする著者の考え方は、たしかに暗示的ではあるが、未然形「たら」の転用とする従来の考えも、なお捨てきれないような気がする。

「じゃ」は江戸言葉ではなく、一部特殊

な人々が故意に用いることがあったというに過ぎない(四三三へ)といわれていながら、「じゃ」をさかんに用いる「古道大意」や「出定笑話」の例を、他の用例と平等に並べて、さかんに引例しているのは適切でないと思われる。

「ずに」という言い方を、助詞「に」が附いて「ないで」と同じ意味に用いられる(四六九へ)とあるが、こういう助詞「に」の性質についての説明がどこにも見えないようである。

「べえ」の接続法(四八〇へ)に、助動詞に接続する場合のことも説明しておいてほしかった。

第十二章助動詞の条では、格助詞・接続助詞・添意助詞に三分して、各種の所属語を五十音順に並べて、意味・用法の説明をして、用例が示されている。助動詞の場合と同じように、各助動詞の意味・用法がひじょうに細かに分類整理されており、辞書的に利用することができるものとなっている。これも一々の語については触れられないので、多少とも疑問の感ぜられたところを二三摘記しておくにとどめる。

「ハチかわった物好、けふで三日。来るか」の「けふで」を下の数詞「三日」に係

るので、この「で」は普通の用い方とは違つて、「今日で」を連体詞と見るべきがとくである(五四七へ)といわれているが、いかがなものであるうか。

「ので」は活用する語の終止形に付くとされているが(六一二へ)、連体形ではいけないのであろうか。また、「ので」「で」は江戸ではあまりこれらを用いなかつたようであるといわれる(六一三へ)が、こういうことも、もう少し細かな説明をしておいていただきたかつた。

接続助詞と同様の語(六二九へ)として、「ものだから(もんだから)」「ほどに」その他の語もあげておいていただきたかつた。

第十三章概括の条には、各品詞について一通り述べたことのうち、特に注意すべきものについて、その要点をかんとんにまとめたものがしるされている。江戸語の全般にわたって、その特色のあるところを概観するには便利なものとなっている。

以上、本書の内容を章の順序にしたがつてかんとんにしるして、気付いた点や感じた点を述べた。本書の内容は、かなり多方面にわたっており、また細かな用例を中心としている。したがって、以上の記述は、

ごく大づかみなところしかできていない。全般にわたること、書きもらしている点をおお二三補っておきたい。

本書が資料として引用した書物の範囲は、洒落本・滑稽本・人情本・笑話本・歌舞伎脚本その他で、かなり多数である。これは巻末の附録に引用書として掲げられている。これだけの資料から、用例をたんに集めて、分類整理することは並大抵のことではない。著者の長年月にわたっての御努力には、われわれは深い敬意と感謝の念を禁じ得ないものである。これらの資料の大部分が、活字鑿刻本であることはたしかに残念なことではあるが、けだしやむを得ないことでもある。本書をもとにして原本との対校によって、さらに深く細かく研究を進めていくのがわれわれ後学の者のつとめである。人情本や滑稽本の一部のものには版本が用いられているが、その中には、出典の示し方の粗略なものや不統一のものがあるのは、改訂の機会にぜひ改めていただきたいものである。「八笑人」や「梅暦」などからの用例には丁附が示してあったりなかったりしている。たとえば、二九二・二八九・三一三・三二二・三二四・三三一・三三五・三四四・三四六などのページに

出てくる「八笑人」からの用例には丁附が示されていない。また、「八笑人、四上、一六ウ」の場合は、「花暦八笑人、四編上巻、一六枚裏」であるが、「娘節用、八、一〇オ」の場合は、「仮名文章娘節用、八回、十枚表」である。丁附を「一〇オ」と出す以上は、「娘節用」の方も、「三中、三オ」すなわち「三編中之巻」と示すべきものと思われる。このように人情本と滑稽本とは、当該箇所の示し方が相違しているが、これは統一されるべきであろう（こういう点についての説明がどこにも出ていないのは遺憾である）。

引用書の中に、「古道大意」や「出定笑話」の名が見えるが、これらは、他の資料とすこし異質のものと思われる。用例を見ると、他の洒落本・人情本・滑稽本などと平等に並べられたりしているが、これは適切ではないであろう（さきに、「じゃ」のことでも触れた）。資料の性質の吟味という点にも、もうすこし配慮していただきたいかと思う。

また、凡例によると、用例を引く場合に、なるべく原文のままとしたが、理解の便や印刷の都合などによって、すこし変えたところがあるとして、(a)(b)(c)の三ヶ条があが

っているが、これにはもう一ヶ条、「(c)促音はすべて、小字で右に寄せて書く方式に統一した」という事項が必要のようである。本書の用例を見ると、すべて促音は小字ではっきり区別して示している。これは決して原文通りではない。促音の表記に關して、一七八ページに「けっかる」と出ている（目次・索引とも「けっかる」が、これは、促音とならない「けっかる」がよいのではないだろうか。東京語では「けっかる」のようであり、辞書類にもすべて「けっかる」で出ている。

総じて、本書には校正上のミスと思われるものが相当目につく。これは改訂の機会にもぜひ改めていただきたい。いま一々 はあげないが、読過の際拾い上げただけでも、かなりの多数に及んでいる。なかでも二五〇ページの用例の出典「八偏人」のようなのは、「八笑人」か「七偏人」かわかりにくい（ここは「七偏人」のようである）。また、一七四ページの「参ずる」（ラ変）や一七五ページのラ変活用は、それぞれ「サ変」「サ変活用」の誤りであろう。「御新造さん」を「御進造さん」（六七ペ）にしたり、「浮世床」を「浮世虎」（二四三ペ）にしたりする類の誤植はぜひぶんに

つくようである。

以上、本書の内容の概略を述べ、あわせて読過の際に感じたり疑問に思ったりしたことの一部を述べさせていたゞいた。中には筆者の誤解にもとづくこともあるかもしれないが、その点はお許しをねがう次第である。江戸語の研究に志す者にとって、本書の刊行はまことに大きな喜びである。国語史の中でも江戸語は未開拓な分野であるために、従来は、すべて独力で模索しつやつやっていかねばならなかつた。それが、本書の出現によって、基礎的な知識が与えられ、また問題の所在がいろいろと知らされることになつたわけである。われわれは、湯沢氏のこの業績を受けつぎ、江戸語の各部分の研究をさらに深めていかなければならない。それが、本書を手にするのできたわれわれ後進の者のつとめであらう。

著者も、幸いにして、最近健康を回復されて、御元氣のようである。今後とも、ますます御壯健で、われわれ後進の者の研究をみちびいていってくださることを切に希う次第である。(東京都千代田区神田錦町一ノ十六 明治書院・昭和二十九年四月発行・A5七五二頁・一五〇〇円)